

# 厚生労働大臣賞（優秀賞）

## 努力の結晶

福島県 鏡石町立鏡石中学校 二年 柳沼 優吏

水道の蛇口をひねる。滝のように水が流れた。触ってみる。「冷たい。」コップも使わず、手ですくい一口飲んだ。「うまい。」僕ののどを潤す冷たい感触。しかし、当たり前前の日常はある日突然とぎれてしまった。

その日、僕は学校にいた。手を洗おうとして蛇口をひねったとたん、大地が大きく揺れた。東日本大震災が起きたのだ。当時、小学三年生だった僕は恐怖におびえ、ただその場にしゃがんでいることしかできなかった。何分たっただろうか。僕には気の遠くなるほどの長い時間が過ぎ、やっと揺れはおさまった。ほっとしたのと同時に、ある異変に気づいた。蛇口が開いているのにもかかわらず、水が出ない。しかし、その時の僕は、そんな状況よりも、家がどうなっているか、家族が無事かが心配でならなかった。

急いで家に帰ると、家の中が大変なことになっていた。床には、戸棚やタンスから落ちた物が散乱していて、それを母が懸命に片付けていた。「水も出ないし、電気もつかないの。でも、明日には直ると思うから、それまではがまんしてね。」そう優しく言う母を信じるしかなかった。

しかし、翌日、水は出なかった。次の日も、そして次の日も……。買い置きしていたペットボトルの水は、なくなってしまった。僕はだんだん腹が立ってきた。手も洗えない。風呂にも入れない。なんて不便なんだろう。どうしてこんな目に遭わなければならないんだろう。つい、いつもの習慣で蛇口を回してしまっただけは、一滴の水も出ない現実には、それまでがまんしていた思いが爆発した。

「お母さんの嘘つき。いつまでたっても出ないじゃないか。いったい、水道局の管理人は何をやってるんだよ。」

今考えると、どれほど母の心を傷つける言葉だったか、無責任な言葉だったかということを知らされる。結局、不便な生活は十日間ほど続いた。

安心して水が飲めるようになり、学年が一つ上がった頃、校外学習として浄水場の見学に行くことになった。そこで僕は、職員のお兄さんから、浄水場と下水処理場のしくみ、そして震災のときの話を聞いた。具体的には、浄水場は水を飲み水にする所、下水処理場は汚れた水をきれいにして、また使えるようにする所だと教えられた。また、震災時には、家にも帰らず、泊まり込みで機械を直したり、薬の調整などを一生懸命に行っていたという話を聞いた。すべては「みんなのために。」という気持ちからだった。そんな苦勞も知らず、自分のことしか考えていなかった僕……。情けなくて仕方がなかった。お兄さんは、コップに水をくみ、優しくこう続けた。

「この水はね、『努力の結晶』なんだよ。水だけでなく、すべてがそうなんだよ。この町も、地球も、君たちも、努力があるから成り立っているんだよ。」

東日本大震災は、多くの犠牲と被害をもたらした。しかし、僕は、日本人が忘れかけていた大切なことを思い出させてくれるきっかけになったと思う。それは、命の重みや思いやりの心、そして物を大事にすることや節約の精神だ。震災後、僕の家でも学校でも、「節約」を心がけるようになったと感じる。「節約」は当たり前のことかもしれない。けれど、当たり前のことを当たり前に行うことが、「努力の結晶への感謝」ではないだろうか。当たり前に使っている水も電気も、その陰には大きな努力が隠されているのだ。

僕は、震災後に初めて水が出たときの喜びを忘れることはないだろう。だから、水道の水を飲んだとき、当たり前前に水が使える幸せに対して、「ありがとう。」と感じる心を大事にしていきたい。